

---

# 優しい静寂の中で

正木 慶史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい静寂の中で

### 【Nコード】

N2851Z

### 【作者名】

正木 慶史

### 【あらすじ】

青年にとって飼っていた猫の死は、友人との別れと同義であった。

月光が優しく地面を照らす。見上げれば、欠けた月が紺色の空に浮かんでいた。濡れるような月の光は、清浄で、神秘的で、汚しがた。時折、手が強張る。喉が焼けるように痛み、頭痛がする。けれど、歩く以上にこの苦しさを癒す術はない。

歩いて来た道を振り替えれば、空の濃紺と混じった海が見えた。海に浮かぶ島々には、たくさんの小さな灯りがきらめいている。

今朝、飼い猫のコノハーが死んだ。昨日の晩、普段は足元に丸まって眠るのが常だったのに、その日は私の枕の横に伏した。妙に鼻先を擦り付けてくるので、抱き寄せ、腕に抱いてその夜は眠った。朝になると、コノハーは私の腕の中で冷たくなっていった。信じられなくて、私はコノハーにタオルケットを掛けて、眠っているコノハーにいつもするようにタオルケットを掛けて、大学へと向かった。

一時の煩雑も、苦悩を消すまでにはいかなかったが、そのことを考えないで済んだ。考えないで済むよう、私は余暇を潰していった。食事をする暇も取らず、私は図書館へ行き、課題である本の要約に励んだ。大学が終わり、バイトの時間になっても、私は仕事を見つけて精力的に働いた。何も考えなくなかった。

たかが猫一匹と人は笑うだろうか。しかし、それは愛したことのな。い人間が言うことだ。私はコノハーを、彼を愛していた。賢く、気高く、偉大な友だった。私の憂鬱の友であり、時折見せる気儘さを愛らしく思う私の子供であった。全身黒ずくめの友。私は彼の死を、まだ受け入れられていない。

どれほど歩いたのだろう。私は小さな公園にたどり着いた。何も考えなくなかった私は、ただひたすら無心に歩いていた。

公園は、時間も時間で誰一人居なかった。公園に植えられている木は月光に照らされ、梢は青白く染まっている。誘い込まれるように、私はその公園のベンチに近づき、腰掛ける。秋寒に冷えたベンチは、肉を通り骨に冷気を伝えた。動かなければ、物を考えてしまう。

「どうして、泣いているの」

木の葉の擦れる音以外にはなにもしない公園に、男の音が響く。驚き目を向ければ、背の高い、痩せた青年が月の光に照らされていた。青年は、私の顔をじっと見つめながら、近寄ってくる。普通なら、夜中に見知らぬ者に話し掛けてくる奇妙な人物を、近寄るままにはしないだろう。けれど、私は疲れていたし、またその疲れも、不思議なことに青年が近づけば近づくほど癒されていくように思われた。

「どうして、泣いているの」

私の眼前に立った青年は再び疑問を発する。青年は、こんな寒い夜に、上着なしで過ごしている。黒髪は月の光に照らされて濡れるかのように艶かしい。

「……言ったら馬鹿にするだろうよ」

私の口は勝手に開いた。しかし、内容は私の思いをすべて含んでいる。

「なんで言う前からそんなことを言うかな」

少し語気にいらただしさを浮かべる青年。彼は腕を組んで私を見下

るした。黒い瞳は、揺れることなく私の目を見つめている。

「……死んだんだ」

「死んだ？誰が？」

「飼っていた猫が。今朝、起きたら私の腕の中で冷たくなってた」  
「……そう」

青年は小さく呟くと私の横に座った。私はというと、ただただ愕然としていた。まるで過去のようになっている。彼の死を悼む気炎は燃え尽きてしまったのかと思うと、自分で自分が情けなくなる。

「どうして嘆くの？」

「それは。5年の間、毎日一緒にいたんだ。悲しいと思う方が、人間の間的だろう」

どうして私は、見も知らぬ青年にこんな話をしているのだろう。けれど、どうしようもなく口は動く。

「分かるはずがないさ。誰にも。コノハーは、私の人生の救いだっただ。誰も知らないんだ。彼は私の陰鬱な気持ちを和らげてくれた。友人を亡くして、嘆いて悪いのか？」

「……そっか」

ふと、私の語勢が荒くなっているのに気づいた。言い過ぎを悔いたが、口から出た言葉は戻ることは出来ない。私は悔いつつ、ただ俯いて地面の一点を見つめるだけだ。

「君の友達は、幸せだろうね。死んだ後にまでそんなに思われて」

「……そんな言い方は嫌いだ」

「ははっ、そっか。そうだね。君はそういう人だ」

なぜ私の人となりをも、それも容易く断言出来るのか。しかし、それがどこか快く思う心もある。

しばしの間、私と青年は黙ったまま夜の闇に沈んでいた。秋の風が身体に吹き付け髄まで冷えるようだが、動けなかった。というよりも、動きたくなかった。半分の月が中天に昇っている。月の下方にはオリオン座が輝いていた。

「月が綺麗だ。月って不思議だね。欠けたかと思えば満ち、満ちたかと思えば欠ける。当たり前のことなのかも知れないけれど、そんな単純なところこそが美しいし、そんな単純な美しさすら知らないで眠っている人のなんて多いことかな」

あまりにも詩的な口振りに、ついつい吹き出してしまふ。そういえば、コノハーは月を眺めるのが好きだった。机に登り、尻尾をゆっくりと揺らしながら、ただひたすらに月を眺めていた。

「君はどう？月は好き？」

「……嫌いじゃない」

「そう、それはよかった」

月は沈々と輝き、私たちを包む。秋風の中、遠くから犬の鳴く声が響く。すると、隣に座る青年は驚いて腰を浮かせた。どうも彼は、詩的なイメージとは程遠い人間らしい。私が小さく笑うと、しかめっ面しい顔をした後、ふと、表情を無くし、呟いた。

「犬はどうして鳴くのかな。飢えているのかな」

「いや、病んでるんだ。犬は病んでいる」

犬も、なにかも、自分がなんなのか分からなくなっている。そのなかで、病んでいる人間が病んでいる人間を馬鹿にする。

「苦惱も、飢えのように、なにかで満たされればいいのだけど」

「苦悩に抗う術は、他の何かにすぎるしかない。しかし、他のものにすぎれば、また新しい苦悩に直面するだけだ」

「悲観論者なんだね、君は。君はどうも、物事の悲しい部分しか見ていないみたいだ。どうして君は、友達との付き合いの悲しい部分しか見ないんだい？ 明るく輝かしい日々は、君にはなかったのかい？」

私は、何も答えなかった。答えられない。私はそれに答えられるほど、目が明るさには馴れていない。

遠く、海があるはずの場所には、紺色で塗りたくったように闇が寝そべっている。月は、徐々に西の方へと傾いて来ている。

「時間は過ぎていく。君はどうするの？ こうして泣くだけなら楽だけど。それがどうだというんだい？」

「……………」

「もうすぐ、日が昇る。今日の太陽は昨日の太陽とは違うのに、君はいつまでも変わらないつもりでいる」

「……うるさい」

「見つめなきゃならない。喜びと悲しみは肩を並べて君を迎える。」

君は、悲しみだけを眺めていては駄目なんだ」

「うるさいっていつてるんだ！」

立ち上がり、青年を見下ろす。彼は私を、揺るがない瞳でじっと見つめる。

「あんたに何が分かるんだ！ あんたになんの権限があって私に干渉

するんだ！あんたに……あんたに俺の悩みが分かるわけないだろう  
！」

「……分かるよ。この三年間、ずっと君といたから」

一言。その一言で、頭の中でぐちゃぐちゃに混在していた奇妙な点  
が一つにまとまり、溶け合った。

「お、お前は……？」

「……言いたくなかったんだけど、ね。そうすると、君はこの姿の  
僕にすぎる。けど、それじゃあ駄目なんだ。君はもう君の道を行か  
なきゃならない」

「……嫌だ。嫌なんだ。お願いだ！戻って来てくれ！」

「嫌だ？無理だよ。これは運命なんだ。運命を、どうして変えられ  
る？」

青年は、コノハは、小さく笑って答える。けれども、私はそれが  
どうしようもなく嫌だった。

「コノハ……」

「……やめてくれない？どうしてすぎるの？君は、それほど情けな  
い人だったのかい？だったら僕は、とんだ見当違いをしていたよ」

コノハは、立ち上がって、ベンチから離れ、公園の中央へとゆっ  
くり歩いて行く。私は、どうしてもそこから動けなかった。

「君が歩いていく道に、もう僕はいない。なら、一人で歩くのが人  
間というものでしょう？」

「嫌だ。俺にはお前が必要なんだ」

「……嫌だもなにも、もう駄目だよ。運命なんだ。一晩だけ。それ



も、運命なんだよ」

「な、なにを言ってるんだ……?」

「たった一晩だけ。泣いている人を、励ますことが出来る。けど、もう駄目なんだ。もうすぐ、月が沈む」

コノハの陰が徐々に薄らいでいく。かと思えば、指の先から、青色の粒子がまばゆく散っていく。

「これまでに君から受けてきた友情が本物なら、お願いを聞いてくれない?」

薄らいでゆく身体。徐々に粒子は激しく散り始め、腕は虚空に消える。

「もう泣かないで。君が泣くと、僕も辛い気持ちになる」

脚からも昇ってきた粒子の波は、コノハを蝕んで行く。私は、焦り、駆け出した。

「もう、悲しいことを見ないで。君には、これから見る楽しいことや、これまで見てきた幸福があるのだから」

俺は、必死に手を伸ばす。触れようとした瞬間、粒子は顔にかかり、すぐに、全身を包んだ。

「そして、僕と歩いてきた道を、思い出してくれたら、嬉しい」

それから、どこをどう歩いたのかは分からない。けれど私は、気が

つけば家のなかにいた。ゆっくりと歩き、朝、コノハーを寝かせた場所に行けば、そこにはタオルケット以外にはなにもなかった。ふと、窓から射し込む光に目を眩ませられる。朝日が昇り始め、新しい太陽が、姿を現した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2851z/>

---

優しい静寂の中で

2011年12月10日00時52分発行